

幸福者



武者小路實篤

者 福 幸



定 価 180 円

新潮文庫 草 57 G

昭和三十年六月三十日 発行
昭和四十四年八月三十日 二十二刷改版
昭和五十六年九月二十日 四十二刷

著 者 武者小路実篤

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

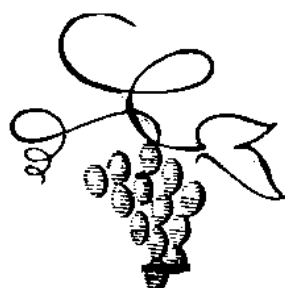
● 印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© 武者小路実篤会 1955 Printed in Japan

新 潮 文 庫

幸 福 者

武者小路実篤著



新 潮 社 版

866

幸福者

この書を岸田劉生兄に捧ぐ

君の芸術に対する尊敬と、君のこの書に
たいする理解に感謝して。

一

自分はここに自分の師の一生を書けるだけ書いておこうと思う。自分はこの書が、誰かに見られるか見られないかそれは知らない。又かようなことは書くべきものか、かくべからざるものか、それも知らない。師がいらっしゃたら、書くなどおっしゃるかも知れない、書けとおっしゃるかも知れないが、しかしともかく自分は書かないではいられない。自分のようなものがかいても始まらないかも知れない。又自分は井のなかの蛙かわずで何にも知らない人間だから師のような方はこの世に沢山いるのかも知らない。そして師のおっしゃったことや行われたことはそう後世に残す程のものでないかも知れない。

しかしともかく自分は師によって救われたものだ。師があつて自分の一生があるのだ。こんな片田舎かたなかで自分が師のような方にお目にかかれたことをどんなに自分は幸福に思っているかも知れない。ともかくこの世で師のありがた味を本当に知っているのは自分達わたくし僅かだけだ。そして自分がこのことをかかなければ誰も他にかく人はない。自分がかくことによって師のありがた味を少しでも他の人に知らすことが出来、そのことがその人の一生にとって私の上に行われたような変化を少しでも行うことが出来ればその人はきっと私が師のことをかいたことをよるこんでくれるだろう。そう云う人が何処どこかにいる。自分はそれを信じてこの筆をとる。

何からかき出していいか自分にはわからない。自分は師の若い時のことは少しも知らない。師

は若い時の話をされるのをよろこばない。

ある人の話だと若い時に師は女のこととでしくじりをして、それから家に居られなくなってとび出して、ああ云う生活を始められたのだと云う。どうしくじられたのかそれは知らない、ともかく師は女を恐れていられたことは事実だ。師はある時こんなことを云われた。「女を愛するならば本^{ほん}当に愛しなければいけない。自分の運命と女の運命を傷つけるのを恐れなければいけない」即^{すなわ}ちその女と夫婦になれることを本^{ほん}当に知るまでは女の心を動かすようなことをしてはいけない。自分は女を恐れるのは、自分と女の運命を傷つけることを恐れるのだ。それ以上に又神の教をきずつけるのを恐れるのだ。それから又師はある時私にこう云った。

それは私が今の妻と結婚しようと思うことを師にうちあげた時だ。師はよろこんでこう云われた。「それはお目出とう。私もそれをのぞんでいた、結婚は早すぎてもいけない、おそすぎてもいけない、無理が一番いけない、自然がいい。結婚したがるのもいけない。さけるのもいけない。来る時が来たら喜んでそれを迎えるがいい。恋はながくはつづかない。それは人生には他にもっと大事な務^{つとめ}があるからだ、女のことには一日も早く卒業するがいい。だがよろこびは味えるだけ十分に味うがいい。だがそれも無理してはいけない、与えられたもので感謝しなければいけない」

自分はその時こう云った。「先生は結婚なさったことがおありになるのですか」

「ない。結婚したいと思った時はあるが、私がうっかりしている内に、相手は他にかたづいてしまった」そして師は大きな声を出して笑われた。

「結婚するものも仕合せだし、しないものも仕合せだ、どっちにも人間のよろこびはある。馬鹿なものも独身の間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると独身の時のよろこびを空想する。しかしそれは馬鹿だ。水を見た時は水の美しさを感じればいい、花の美しさを見た時はその美しさばかりに氣をとられるのが本当の人間だ。どっちでもいい、どっちにも美があり、よろこびがある。春もいいが冬もいい、冬もいいが春もいい。どっちもいい、冬は冬をたのしみ、春は春をたのしむ。かわりがわりに来れば、又それをたのしめばいい。自分は独身のことを考えると独身もよく、結婚すれば結婚もまたいい、自然に任せておく、無理してはたに迷惑をかける程のものではない。お前が結婚すればそれが嬉しい。お前が結婚しなければそれもうれしい。その為に誰をも不幸にしないですめばなおうれしい」

自分はその時、自分の妻を恋している男のことを思い出した。自分はその男を同情することも愛することも出来なかった。そして反ってその男を淋しくすることにある快感を感じていた。自分はそのことを白状した。師は一寸いやな顔をされたが、すぐ、「それも仕方があるまい。その男がそれから墮落するとも、それはお前のせいではない。それでその男が墮落せずに更によくなったらそのことは反ってその男にとって幸になる。そうなればなおよろこびだが」

「結婚すると人間は駄目になるものでしょうか」

「そんなことはない、それは失恋すると人間が駄目になると云うのと同じ程度の話だ」

自分は余計なことをかきすぎた。ともかく師は常に自分に与えられた運命によるこびを感じて生きておられた。

師は他人にたいして多きをのぞまれなかった。他人がいいことをすることによるこぼれた、他人の幸福をよるこぼれた、それが自分には貴く思えた。そして自分がややもすると他人の幸福を猜そなんだり、呪のろったりする傾きのあるのを情けなく思った。自分は師にそのことを云った。

「それは仕方がない、若い内は自分もそうだった。この頃は誰より自分が幸福だと云うことを本当に知った。だから他人のことは羨うらやましくは思わない。自分が他人をしのごとく云う気がある間、自分が他人に負けるのをいやがる間、そう云う根性はなくならない。しかし気にするな。又そう気にも本当はしていないだろうが、そしてもっと大きい心を持つようにする方がいい」

師は滅多に怒らない方だった。すべて許す方だった。

「俺は他人をせめることは出来ない、自分の内にはもっと恐ろしいものがあることを反省しないではいられないから。自分の心のけがれを思うのは情けないが、他人の罪に寛大になれるのはうれしい。しかしその為罪を罪のまま許すようになるのは恐ろしい。自分のわるいことを本当に知っている罪人は自分を正しいと常に思い込んで他人を責める人間よりはずっと幸福だ、その人は神の愛を知ることが出来るから、そしてありがたいとか勿体もったいないとか云うことを本当に知ることが出来るから。この世に一番救われないものは神にたいして不平をもつ奴だ」

師は又こんなことを云われた。

「千ベン悪の種をまいて、悪の芽が出ないことを本当にありがたがるものは、千ベン善の種をまいて、その芽が出ないでも神を呪わない。更に善の種をまこうとする。そしてその芽のいつか出ることを信じて、それを信じることが出来ることによるこびを感じる。そして悪の種をまくこと

の恐ろしさをますます感じてくる。そう云う人間は救われる。人間はある時には神になる。しかしその次の瞬間には最も下等な人間にもなれるものだ。それと同じく最も下等な人間になりきったことを本当に自覚した瞬間に人間は神にもなれるのだ。ある人を善人、ある人を悪人ときめるな」

自分はその時師にこう云った。

「しかしこの世には、神になれない人間もあるでしょう。私にはそう云う人の方が多すぎるように思えます」

「そう云う人はないとは云えない、しかしあるとも云えない。そう云うことは自分達人間には云えない。本当に強い真心をもった人の愛の光に照らされて見たら、存外に神になれない人と私達が思いこんでいる人間が神にならないとも限らない。それを知っているものがあれば神だけだ。人間にはわからない」

師は小さい小屋に住んでいられた。その家はある人が師に捧げたのだ。飯の世話は自分達が当番をきめて、うちでつくった飯をはこんだ。自分の仲間は六七人で、かわり番に飯をはこんだ。師は初めは自分で自炊していられた。そして他人の耕作を手つだったり、或人からもらった僅かの畑を自分でたがやしたりしていられた。自分達が飯を運ぶようになってからは師は自分の土地を近所の一番貧しいものに与えてしまわれた。時々手つだわれることはあったが、一人で方々歩きまわられることが多くなった。師はその時何か大事なことを考えていられるようだった。師が口について出る言葉は多く、瞑想から得られた。本も時々はやまれるようだったが、非常な学者

と云うわけにはゆかなかつた。耶蘇^{やそ}や、釈迦^{しゃか}や、孔子や、ソクラテスを尊敬されていた。しかし本をよむよりは考える方を好まれたらしかつた。学者はあまりすかれなかつた。自分が生かすことの出来ない程多くを知りすぎるのを師には害があつて益がないように思われた。

師はどんな学者が来ても恐れずに、自分の思うことをしゃべられた。「笑われるのを恐れるよりは心にないことを云うのを恐れなければいけない」

師はそれを実行された。師は心にないことは一ことも云われなかつた。むしろ師の心には云いたいことが多すぎた。師の内にある貴い言葉は、出る機会を得ずに、沈黙の内に葬られた言葉がどんなに多いだろう。又よしその言葉が機会を得てあふれ出たにしろ、その言葉の価値をそのまま受け入れられたことは殆^{ほと}んどないであろう。自分はそれをすまなく思っている。

師はこう云われたことがある。

「福音書は耶蘇のかかれたものではない。ただ其^そ処に耶蘇の心からでなければあふれ出ない言葉や行いが処々に片鱗^{へんりん}を見せている。それが実に恐ろしい。その深さとその權威にふれると心が自ずと清まってくる。その前に跪^{ひざまず}きたくなる。全然とは同感の出来ない言葉があつても、その深さには頭がさがる。その力は何処からくるか。其処が面白い所だ。俺は来世も復活も奇蹟^{きせき}も信じられなくも、耶蘇の心の深さには実に心の底を動かされる。その力は何処からくるか。その力に自分自分の一生をまかせたい。それだけが自分の一生をささえている心棒だ。それがなければ世の宗教家程くだらぬものはない」

師はその力を信じていられた。或日のことだつた。師は私^{ひそ}かに自己の心のうちだけで盲目の目

を信仰の力でなおそうとされた。そしてそれが失敗した時に、師は泣かれた。「自分は信仰の力で盲目がなおし得ると云うことをまだ信じきっていないのだ。それが信じきれたら、盲目の目もなおらないとは思わない。だが、自分は正直に云うと耶穌が盲目の目をなおしたと云うことも信じられないのだ」

「それならなぜなおそうとされたのです」

「あまり可哀そうだったから。父と子が五年の間わかれていた、子が五年ぶりで帰って来た、その五年の間に父は盲目になった。父は自分の子供の顔を見たいのをじつとこらえて涙ぐんでいた。子は自分の顔や姿を父に見せられないのをたまらながった。俺はそれを見ていたらつい父の目をなおしたくなったのだ。だが俺にはその力がないことを知りすぎていた。しかし心でその目のなおるのを神にいのらないわけにはゆかなかった。そして心で目をひらけと云ってみた。その時自分の權威のないことを実に露骨に感じた。自分を恥知らずだと思った。そしてつい泣いた。二人に同情して泣いたのではない。自分の恥知らずなので泣いた。汝^{なんぢ}信仰うすき者よ。自分で自分にそう云って、歸りに山の中で跪いて祈った」

しかし師のこの祈が神にきかれたと自分は云いたい。しかしそう云いきるのを師は恐れていられた。彼の父の目はその後まもなく見えるようになったのだから。医者には不思議がった。しかしまますう云う運のいい方もあるものです。と云った。

自分は師にそのことを云った時、師は、

「その話はやめてくれ。俺にはそれは信じられない」

しかし師は祈はきかれるものだと言われた。

「しかしそのきかれ方は人智ではわからない方法できかれるので、見ようによっては、きかれたとも思え、きかれなかったようにも思える。自分にはまだ信じきれないが、本当に祈れる人間には祈はきかれるものだと思う。本当に祈れるには私心がすこしもあつてはならない。神の御心を心からあがめることが出来なければならぬ。この祈がきかれなかったら大へんだと思う間はきかれない。大へんだと云うことを忘れてしまわなければ。しかしこう云うことははつきり云うのがまだ自分には恐ろしい。ともかく心を清くして御心のままに自分をおつかい下さい、そう云う氣持になりきれたら、既にその事が祈のきかれたことになるのだ」

師はよく自分のことを幸福すぎると云われた。他人にこの幸福をわかちたいと云われた。そして實際師にせつした人はその幸福のわけまえをうけとる。自分は師のことを思うと涙ぐむ。心が清まる、そして清い幸福を心の底から感じる。其処には邪念がない、不浄がない、不浄と邪念がいかに人間の心を動揺させ不快にさせるかは、清いよろこびを知ったものだけが知っている。すべてのこの世の悪は其処に生ずる。

それならばなぜ人は悪を愛するか。清い幸福を知るものはなぜ立派に悪にうちかてないか。

自分は或時美しい女が師をたずねて来たあとで師がこう云われたことを聞いた。

「自分は罪の恐ろしさを本当に知らない。自分は今日の女は俺の自由になることを知っていたら、そして女が自由にされたあとで、そのことを絶対に秘密にすることを知っていたら、そして自分はその女を一度自由にしても二度と自由にする気が起らないですむことがわかったら、そし

てそのことがその女に道をとくに邪魔にならないことがわかったら、そしてそのことが自分の心を疚やましくしないことが出来ることを知っていたら、そして女をもてあそびたい心はやがて過ぎさるものと云うことを知らなかったら、俺はあの女をただは帰さなかった。しかし俺は女と三時間さし向いに二人きりで話してその女をもてあそぼうとしなかったのは、その反対のことをのこらず知っていたからだ。あの女は淫売婦いんばいふであった。今も淫売婦である。自分はもう少しで女の前にひざまず跪こうかと思った。そしてその女の前に罪を犯して知らん顔をしようかと思った。そのことは出来ないことでない。現在俺は今までに正直なところ、そう云うことを絶対にして来なかったとは云えない。俺はその罪をくり返すことの誘惑を可なりうけた。自分はそのことだけの罪と云うことを存外強くは知らない男だ。俺は女の自然につくられた美を拝みたい気の存外強い男だ。しかし俺はその時思った。もしそのことをしたら、俺はその女とはもう霊の話は出来ないと思つた。そして万一その女が俺にもてあそばれたことを吹聴ふちやうしたら、俺は君達になんとあやまつていかかわらない気がした。それは大したことではありませんと君達は云うか。もしそう云うにしても君達に随分いやな感じを与えるだろう。君達はまだそれでもいい、しかしその時俺は偽善者になる、百日の説教屁一つと云う諺ことわざがあるがそれよりは遙かに罪が深く、ききめがつよい。俺のつかえている真理の威光に関する。そして恥かしい話、俺の威厳にも関する。女が秘密を守ってくれたら、俺は図々ずずずしくすまして、聖人らしい道をとくだろう。しかしその時、俺はその女のことを思う度に、俺は不浄な考えを起すだろう。そしてその女には清い話が出来にくくなるだろう。女が俺をたずねてくれた志を無にするだろう。俺は一寸ちよつとその時辛抱すればいいことを知って

いた。それで俺は罪を犯さずにすんだ。女はそのことをよろこんだにちがいない。俺も今によるこぶにちがいない」

自分はそれを聞いた時いやな気がした。師はもっとそんなことに超越していられるとばかり思っていたから。師はそれを気づかれ、こう云われた。

「俺の露骨な話は君を不快にしたろう。しかし君も思いあたる時があるだろう」

そして自分はその後まもなく思いあたった。しかしそのことはここにかく必要はない。

その後師の処にはよくその女がたずねて行った。師はその女の来るのをよろこばれているらしかった。しかし或日その女の情夫だと自称した男が師の処にあればこんだ。師は別に腹もたてられなければ、おどろかれもしなかった。そして自分がその女とそう云う関係をつけなかったことをよろこばれた。女は師のことを神のような方だと云った。私はあんな方にお目にかかったことはありませんと云った。師がその女を弄もてあそばれなかったことは師にとっては大したことではなかったかも知れない。しかし師ほど悟っていないその女の一生にとっては大した働きをした。

師はおかげで女のことには卒業が出来た。自分はもう女をおそれないですむと云われた。しかしその後も積極的には女の家には出かけられなかった。

「自分の一生を平和にする為には心を静かにすることが必要だ。愛するのも怒るのもたまにはいい、しかしそれは浅薄ではいけない。利己心や小さい根性から生れるのは皆自分の心の平和を乱し、心をいやしくし、自分の生きている世界をいやしくする。心を清くもつものは自分の生きている世界を清くし、平和のよろこびを心の底から味うことが出来る」

或時だった、或人が師をたずねて、この頃の人間はずるくって困ると云った。すると師は、

「そうですかね、私はまだずるい人にあつたことはない。ずるい人に逢いたくなかつたら、ずるい人をよびよせるものを自分から遠のけるより仕方がありません。私の処にはずるい人は用がない。だから私はずるい人に逢つたことはない。話ではききますが、私の処にくる人は皆いい人ばかりです。そしてその人がとくにいい心になつてくれる時だけ私と話が出来る、いい心になりた

い人だけ私の処に話しにくる。私は仕合せものです。あなたもそうなつてはどうですか」

「ありがとう。だが私はずるい人が来てくれる身分の方を愛しますね」その人は笑いながらそう云つた。その笑いは私には卑しく見えた。或時師は又こんなことを云われた。

「皆身から出たさびだ。さびが出るのは身からばかりではない。又外界ばかりでもない。罪は両方にある。さびを出すのがいやだったら自分を純金にするか、たえず自分をみがいていなければいけない。自分を純金にすることが出来ないくせに、自分をみがきもせず、さびが出るのに不平を起すのは己を知らないものだ。殊に自分のことを棚にあげて自分のさびを相手の罪ばかりにさせるのは虫がいい」

或人が師をたずねて、

「この世の中はどうしたら幸福になるのか」と聞いた。師は云つた。

「あなたはそれを本当に知りたいのか。私も本当にそれを知りたい。ともかく私達は不幸な種を自分でまきすぎている。それはたしかによくない」

「不幸な種をまきすぎている？」